



佑 啓

社会福祉法人 佑 啓 会 ふる里学会
〒290-0265 市原市今富1110-1
☎0436-36-7611
発行者 里 見 吉 英
編集者 三 股 金 利

指導員職を考える

古 川 弘

絵空事が、正真正銘の本物になることがある。高令期に入ってから少しも永かった人生と思えないのは、何故だろうか、直結して、幼少の時代につながる。その頃、澄みきった夜空に皓皓と冴える月をみつめて、幼馴染みと異句同音、呟く言葉が、「月の世界に行きたいな」だった。不可能な夢が膨らむ童心。でも、反面すごく実現したい子供の夢に違いない。

それが現在、日米両国の人達の協力で実現している。まさに宇宙の時代である。その中の衛星「地球」は？この小さな地球では、人間という生物の社会があり、その歩みがある。個人、家族、民族そして国家が形成されている。平和と共存を建前としながら人間の社会は複雑である。

さて、複雑な社会の中で、「福祉」の世界も多岐にわたる。私事ながらこの仕事に手をつけてから四十七年余、この度の宇宙衛星の旅に匹敵する程の福祉の変遷は、みられなかったが、福祉理念の変わりようは、連綿と蓄積されていることは事実である。特にここ数年、障害者や児童福祉の問題が驚くべき変化をみようとしている。「変るべくして変る福祉」と私は確信しているが、ようやく具体的様相を呈しつつある。「社会

福祉基礎構造改革等障害者福祉施策」の検討が、官民一体、結論にむけて密着されている事実が、これを証している。

与える福祉、与えられる福祉、かつての上下関係の上に成りたつたような錯覚にあつたものが、社会構造上、必要に応じて利用する仕組みとなり、対関係で成りたつ福祉が展開されることとなるだろう。義務と権利が、平等にひとりの人間に、獲得且つ行使できることが、明示される筈である。

ここで、構造改革論について、おこがましく安易に、もの申すことは、避けた。むしろ、現場で中心的活躍している「指導員」諸君に關連しての提案を試みることにした。

私事ながらここ十年余、厚生省より日本愛護が受託している「厚生省心身障害研究」の分担研究に参画してきたが、その最終年度研究、「障害児（者）施設体系に關する研究」のうち分担研究課題「施設機能における専門性と職員配置のあり方に関する研究」を各氏の協力により稿了した。その項目の中から一部を引用して「指導員の呼称」についての私案を参考提案しておく。その主旨は、「指導員」名称を「相談員」とするとうものである。

これは、現実論か、空想論かは別として、発想の転換による意識の改革を基盤として、提案したものである。それは、知的障害者の方達の人格を正視する援助技術の理論と実践のマニュアル化であり、実践の普遍化を求めるものである。

「3、指導員名称を考える」
指導員の日常活動は、直接処遇職員という表現で呼称されている通り、障害者とのかわりがすべてである。最近、話題となり、「指導・訓練」の用語が否定されて、「援助・支援」という視点の日常活動が展開されている。これについて、思想的正当性は、理解することができ、日常活動の中での指導・訓練との整合性を比較すると、理論的に未成熟な部分があるように思える。この部分については、今後の重要な課題となるであろう。

この点、「指導員」という呼称を交えることを提案する。勿論、改めるに当たっても専門性を強調したものであり、且つ一般的に理解し易い実用的名称を考えてみたい。一私案として、一般的な呼称として「相談員」を採りあげてみた。

まず、「相談」の意味を小学館発行「国語大辞典」より索引する。「相談」どうするかを決めるために話し合うこと。話し合い。談合（だんごう）。「相談に来る。」

「相談を持ちかける」―すくすく「相談員」（形動）（すぐは接尾語）何事も相談すること。また、ひとりきりせず、すべて相談の上で行うこと。また、そのさ。―や「相談役」①相談にある。②相談相手になる人。③会社などで重要事項に関する助言や紛議の調停などのために、任意に置く役。また、その役の人。―以上が辞典の索引であるが、企業・団体の「相談役」は、説明の一部に含まれている意味として、企業・団体等の相談役は、ややタテ割・上下組織を意味させるように思われるが、一般社会生活にみられる日常での「相談」は相方共、対等の関係において話し合うことが、原則に思える。一方向的押しつけるものであれば相談は成立しない。勿論、相談によっても結論や決定の成立しない場合もあるが、相方了解の上、別の機会に相談を続ける場合もある。（中略）余談ではあるが、施設・団体などで、関係者の自由討議・協議がまとまり、その意見が反映した機関決定は、良質なタテ割り組織によって、一層その事業の発展的推進が約束される。

話を戻して、指導員は、障害者を支援する立場、障害者は、支援を求める立場。言葉を変え、支援してあげる立場と支援される立場。（極端には、指導してやるに對し、指導作業させられる立場も。）人権尊重、社会自立を支援するという大前提は、正論で

あるが、潜在意識の中に、上下関係の意識も皆無と云いられるか、疑問と思える。しかも意識として留意すればよいという、安易な解決に留めておく問題ではない。今後の大きな福祉理念のひとつである。以上の観点から「相談」の言葉の意味合いを重要視して、指導員の名称を「相談員」と変えることを提案したい。」

（以上略・原文のまゝ）
本文では、「相談員」の職務分担の専門性を表示する意味で、指導員を、「生活相談員」「作業相談員」「介護相談員」など各種の相談員免許も例示されている。これは一試案であり、今後の福祉の変革に沿って重要な研究課題と思われる。特に、明確な任用資格と業務独占の優位性ならびに福祉職の給与体系の確立など希求したいものである。

なお、当研究には、入所者の長期滞留化現象に対処し、施設機能を再構築し有効に活用することを提示している。なお、本研究の趣旨「ライフ・サイクル」にそって研究検討、各氏により次のとおり分担研究報告している。

一、乳幼児期の発達支援サービス
二、ファミリーサポートを基本理念とした児童施設機能
三、成人期の支援機能とその専門性
四、高令知的障害者が求める専門機能

（佑啓会 理事長）

機能

「海外にいつて勉強して来い。」と施設長から突然のお言葉。自分のようなベビーには海外研修なんて全く縁がないものと思っていたのに……

この度十一月十一日～十一月二十一日までの十一日間、ギリシャ・ハンガリーへ海外視察研修に行つて参りました。今回はその報告をさせていただきます。

出発日が近づくにつれ、期待と不安の入り混じる毎日でしたが、研修三日前には私のために(酒盛りのため?)学会職員総出で盛大な壮行会を開いて頂き、また、出発当日には施設長と主任が空港まで見送りと超VIP待遇を受けての出発となりました。

今回研修に参加されたメンバーは十五名。参加者名簿を見ると理事長・施設長・課長等々、恐れ多い役職の方たちばかり、それを見て小心者の私は場違いではないかと深く考えていました。飛行機に乗り込むと一瞬に日頃のノートンキがでたのか離陸する前には深い眠りについていました。

そして最初の国ギリシャ(アテネ)に到着。ギリシャでは施設等五ヶ所を見学しましたが、内容的に日本と同じものが多く、コーディネート制度に似ているものやレスパイトサービスなどがありました。少し違う点は、障害者に対して利用者というよりも生徒という感覚が強く、教育的プログラムが多いようでした。また、生活習慣では働き終える時間が午後二時位まで、その後昼寝をして夕食は九時位から食べ始めるのが一般的で国民性の違いを感じました。(いうまでもないかも知れませんが、私は夕食まで待ち切れず、大変でした。)また、研修の合間をぬつての観光では古代の宮殿や神殿の遺跡等を見学しましたが、紀元前に建てられたのにとっても良い状態で残っているのには感動しました。そして研修も中盤にさしかかる頃には、学会で指導を頂いている酒盛りの成果が発揮されたのか、毎晩を交わしていくうちに

ハンガリーでもハングリー!



諸先輩の先生方に可愛がって頂けるようになりました。

そして次の訪問国ハンガリー(ブダペスト)へ到着。ハンガリーでは施設等を四ヶ所見学しました。印象に残っていることは、統合教育についての考え方で、

一方は先駆的に普通学級の中に軽度の障害者を受け入れ、障害者と健常者が小さい頃から歩みよることが大切という考え方。もう一方は、無理に一緒にすることでお互いに負担になつてしまうこともあり、個人(障害)にあった教育をするべきといった考え方。どちらの言い分も納得できる部分があり、考えさせられました。また、福祉の流れるには施設の小規模化、ハード面の整備、人権擁護など日本と似ている部分も多くある反面、大規模施設では一部屋に二段ベッドが十台位ある居室があるなど、理想と現実のギャップがかなり大きいようでした。

観光ではブダペストの街並みはとても美しく、丘から見下ろすドナウ川や橋、建物の一つ一つは言葉では表現できないほど絶景でした。また、ホテルの横がオペラハウスだったので、参加者全員で観賞しました。田舎者の私は当然初めての体験で最初は緊張して観ていましたが、途中空白の時間が訪れ、船を漕いでいる状態で熊のうめき声のようなハモニーを奏でてしまい、後ろに座っていたアメリカ人マダムたちが咳払いをしていたとのこと、隣に座っていた先生に肘でつかれ起こしてもらおうという失態をさらしてしまいました。(その時は恥ずかしかったが、今では良い思い出と勝手に決めています。)

今回の研修でギリシャ・ハンガリーの福祉をすべて理解できたとは思いませんが、実際にその場に行き自分の目で見るのが出来たのは本当に良かったです。また、参加された先生方からいろいろ話を聞けたことは、自分にとって必ず財産になることと思います。

私の姉

佐々木 保代

私にとつての姉の存在は、正直よくわかりません。かけがえのない存在だとかいてくれてよかったと思えたことはあまりありません。でも、この機会にあらためてよく姉のことを考えてみました。姉がいたから、今の私がいるんだと思うと、姉は大きな存在だという、実感がわきました。

昔、私が幼稚園に通っていたころに、「学校行きたくない」と、泣きながら部屋に入ってきて、母が私に「あつちいってなさい」と言ったことが、とても鮮明に頭に残っています。あの時が、姉が交わってしまった瞬間だったようです。母に昔の姉の話を聞くと、文句一ついわずよく私の世話をしてくれたそうです。そんなやさしい姉のことを、私はまったく覚えていません。「今」の姉しか知りません。欲しい物があれば「コレ、ちょうだい」と言つて持つてきて、「いいよ」と言つと、「ありがとう」と、飛びはねて喜んでくれます。その時は、私もあげてよかったという気持ちになります。が、数分後には何の関心も持たなくなり、しまいには人にあげてしまつたりします。

夜は家中を歩き回り、すべての部屋のドアをあけっぱなしにし、電気もつけたまま。勝手にご飯を食べたり、朝の三時頃から起きたりします。昼間は何もせずほとんど寝ているからです。そんな、人に迷惑ばかりかけている姉ですが、私の家族なんです。姉なんです。だけどやっぱり怒つたりしてしまい、結局「どうして優しくできないの?」と、自分自身を

せめたりします。姉は、何かに熱中することができないから、生きていてよかったと思う喜びが、ないような気がします。あえていうなら、おいしい物を食べている時は、本当にうれしそうです。こう思うと、知的障害は絶対におおることではないのが、本当にくやしいです。

私には兄もいますが、兄も身体障害者で、母が家で面倒をみています。母は今年で五十一歳です。一人で長い間ずっと、障害者二人と、もう一人の姉と私を育ててくれました。もうそろそろ、私がしっかりとできた頃頃だと思ふので、母にはもう少し私を頼りにしてもらい、負担をやわらげてほしいと思います。

全員が集まると、とてもにぎやかになり、うるさいくらいですが、私にとつては、とても幸せな時です。

私の夢は、早く大人になって、兄と姉を支えられるような人間になり、母と、兄弟四人で一緒に過ごすことなんです。五人のうち、誰か一人でもいなくなつたら意味がありません。少しでもはやく、その日がきてくれることを、いつも願っています。姉の存在も、私の夢に本当に大切な存在としておかれています。なんだかんだいっても、かけがえのない存在のようです。(笑)

(佐々木 茂乃・妹)

編集後記

幼い頃に読んだSF小説や漫画では二十世紀と言つと、とてつもない夢の世界でした。車は空を飛んでいて、宿題はロボットまかせ……。今年で二十世紀も最後。「佐啓発行ロボット」は今年でできるか……?

堀金 兼太郎